
山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター

センターだより 第114号 (通巻第181号)

2013年1月17日 発行
山梨大学教育人間科学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325, FAX 055-220-8790
E-mail: jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: <http://www.cer.yamanashi.ac.jp/>

■平成24年度第3回連携・教育研究会のご報告

第3回連携・教育研究会が11月28日(水)に、山梨県総合教育センターにおいて開かれました。本学教育学研究科教育支援科学専攻(教育支援科学講座)谷口明子教授による講演会と主事研究の分科会が行われました。

講演会は、「校内研究に活かす質的研究法～よりよい授業実践のために～」をテーマに、質的充実を目指した校内研究の在り方を提示し、研究方法を見直す視点を示唆していただいた講演でした。内容を簡単に紹介します。

よい研究とは、今まで分からなかった新しいことがわかること(情動的価値)と分かったことが何かいいことに役立つこと(改善への貢献)の2点の価値をもつことであり、理論研究だけでなく、明日の教育実践に実際に役立つかが問われる。

質的研究方法とは、質的データの収集から始まる。質的データとは現象を言語的な記述で表したデータのことであり、例としてインタビュー逐語録や授業観察記録やエピソードがある。授業実践エピソード中の子どもの姿は、実践の事前データや実践の効果を示す根拠として活用できる。エピソードは、抽象的な言葉で綴ってしまうのではなく、具体的なエピソードとして記述することが大切である。

校内研究の授業実践で得られた教育成果をまとめる際に、数値で結果を示す量的な研究だけではなく、質的研究を組み合わせしていく大切さを再認識するご講演でした。

■平成24年教育ボランティア報告会が開催されました

平成24年度「教育ボランティア報告会」が12月5日(水)に、N-11, N-12教室で行われました。「教育ボランティア活動の振り返りを通じて、お互いの学びを共有したり、悩んでいることを相談したりする」ことをねらいに、昨年度から始まり2回目をむかえました。87名の参加者を得て、充実した学びの場になりました。

前半は、社会科教育4年の沖翔太さん、数理情報3年の天野正博さんによる体験発表がありました。教育ボランティア活動を通して感じたこと・得られたことなどが熱く語られました。

後半は15のグループに分かれ「教育ボランティアで学んだこと」というテーマに沿って話し合いました。1グループが約6名前後だったこともあり、活発に意見交換が行われました。活動先がそれぞれ違うので、異なる体験をききあったり、新たな気づきを得たりと、大変有意義な報告会となりました。以下に、一部を紹介します。

- 生の学校現場で担任の指導の仕方や生徒指導など学ぶことができる。教師の言葉かけの違いで子どもが変わる。
- 実習よりも長期間にわたって子どもと触れ合える。子どもの変化が分かる。
- 発達障害の子どもとの関わり方が難しい。

- 自分が教員になったときどうするかを考えられる。叱り方のむずかしさ
- 教育ファームでは、学校外での子どもの姿を見ることができる。食育について学べる。
- 子ども図書室では赤ちゃんからお兄さんまでの子どもたちがいて、発達を感じられる。いろいろな子どもに合わせて対応しなければならない。



■山梨県教育委員会「第2回 教育相談活動研修会」のご報告 (山梨大学戦略的プロジェクト経費地域連携事業支援プロジェクト)

山梨県教育委員会主催の「第2回教育相談活動研修会」が12月11日（火）、県教育センターにおいて開催されました。県内教育相談活動関係者が一同に会し、「地域連携 子どもと親と教師のための教育相談事業」位置づけの確認と山梨県の子ども支援事業の現状報告がありました。県内の不登校児童生徒数への支援と併せて、昨今の大きな教育課題となっているいじめ問題への対応について意見交換が行われました。附属教育実践総合センターからは谷口明子教授が出席し、相談員の力量形成を目的とした研修会講師として「不登校・発達障害ときょうだいの問題」のタイトルで講演を行いました。

■授業支援システムとしての Moodle 説明会（第1回）のご報告（12/14）

12月14日（金）に、e-Learning システムの利用方法の説明会が E-ラーニング・ワーキンググループ委員会等の主催により、以下のように開催され、21名が参加しました。今年度は、2月中旬に、教材の提示・課題の提示（オンラインテキスト、ファイルのアップロード）等を内容とする第2回 Moodle 説明会を計画中です。

- 日時：2012年12月14日（金）16:30～18:00
- 会場：第一実習室（情報メディア館 2階）
- 説明担当者：
 - 佐藤真久（Eラーニングプロジェクト委員会委員長，工学部基礎教育センター）
 - 小俣昌樹（Eラーニングプロジェクト委員会委員，工学部コンピュータ理工学科）
- 内容 来年度から導入される Moodle 2.3 に関する説明・講義ビデオファイルの作成・編集・掲示

※ Moodle は、インターネットを介して授業用の教材や学習材を提供する e ラーニングシステムです。その機能として、教員が Word・PowerPoint・PDF・ビデオなどのファイルを掲示できる「リソース」、多肢選択問題や記述問題などを出題できる「小テスト」、学生がレポートなどのファイルをアップロードできる「課題」、および、ディスカッションや相互交流の場となる「フ

オーラム」や「チャット」などがあり、授業における活動・協調・省察を支援・促進します。これらにより、Moodle を 100 %のオンラインコースとして利用することもできますし、対面教育の補助として利用することもできます。

■授業研究演習室（J422）整備のご報告

平成24年度学部教育機材・器具更新費（後期）予算配分により、WindowsPC 画面を提示する液晶プロジェクター及び DVD レコーダーがブルーレイ DVD 対応のものに更新されました。機器の交換にあたりご迷惑をおかけした先生には、あらためてお詫び申し上げます。利用をご希望の先生は J424（教育実践総合センター事務室）までご連絡ください。

■岐阜聖徳学園大学視察の概要についてのご報告

日時：平成24年12月11日

場所：岐阜聖徳学園大学にて

視察者 蘓原桂 小池正 山村新一

岐阜聖徳大学出席者 教育学部長：柏木良明様

教育実習課課長補佐：井上淑勝様

就職課係長：五島明美様

<岐阜聖徳学園大学について>

- ・岐阜聖徳学園大学は、教育学部・外国語学部・経済情報学部がある。今回訪問した教育学部は羽鳥キャンパスにあり、JR 岐阜駅よりバスで25分。郊外の静かな環境の中にキャンパスがある。
- ・教育学部卒業生338人中、正規非正規を含め261人が教職に就いている（77%以上）
- ・特色ある教育プログラムとして1年次から学校現場にかかわる教職体験群と年間7回にわたって子どもたちと農作業などの体験を行う子ども理解科目群からなる「クリスタルプラン」を実施している。
- ・高い就職率と教員養成という視点から4年間のプログラムを組んでいる点に特色がある。



1 就職支援プログラム等について

(1) 資料集「教員になる」、授業科目「教師への道」の内容について

- ・「資料集教員になる」は本学のオリジナル。教員採用試験を受けた学生が後輩のために情報を手書きで残してくれたものをまとめる。就職課で1冊の冊子にする。春のオリエンテーションまでに完成させて配付する。100P。全員が問題を解いてみる。門外不出。教員採用試験を受けた県のものがある。生々しい体験（暑さ対策、会場までの地理）が載っている。
- ・「授業科目：教師への道」は、（就職課で教員養成講座も開いている。）中学校のOBで指導主事、義務教育課長経験者が講師。4年の前期の授業で教員志望学生の力量を高める内容。教師としての心構え、試験対策、面接指導などを行っている。カリキュラムとしての「教師への道」は講師1名に対して、学生は60名が受講。その他の時間として就職課が実施する教員養成講座はのべ250人が受講。就職課長や、外部講師（県教委OB）を講師として依頼。学生同士で面接し面接官役をすることで新たな発見をすることがある。

(2) 就職支援科目と就職支援プログラムを計画的・体系的に進めているとあるが、実際にどのように

進めているのか。

*クリスタルプラン（岐阜聖徳学園大学のオリジナルメニュー）

- ・1年次に学校ふれあい体験，2年次に協力校で観察実習，3，4年で教育実習を行い，各学年で現場に関わる体験を行っている。
 - ・市内外で約300校の協力校。教育実習は母校実習ではなく，地域の学校に受入をお願いしている。
 - ・ここで行うふれあい体験とセミナー，教師への道，オリエンテーションなどのプログラムが支援プログラムといえる。
 - ・1年次のふれあい体験はほとんどが奉仕作業的なことであるが，協力校にボランティアとして現場の様子を参観させていただくことで，1年生のうちから教師としてのモチベーションや目的意識を上げることができる。
 - ・2年次になって観察実習をして指導案に初めて触れる。授業参観や研究授業というものを理解して3年の実習に臨む。この段階（単位）をクリアしないと3年に進級できない。
- ☆1年から3年までの前期に「一般常識・基礎学力テスト」を行う。これは，就職試験で出題される問題を本番同様に取り組むもので，結果報告書で自分の状況を知り，就職試験に向けて今後の対応の参考とするデータを得ることができる試験である。
- 高い就職率の要因の一つにこのテストの存在が考えられる。

Q 大学のカリキュラムができていの中で山梨大学として就職支援の方策についてどこにどのように組み込むか思案しているという質問に対して。

- ・カリキュラムと就職支援とのつながりは聖徳も難しい課題ある。
- ・クリスタルプランを始めた頃は新しい試みなので大変であった。各実習校に教員が挨拶に行くなどの仕事がある教員の負担が増えたことは事実である。
- ・しかし，教員全員がクリスタルプランに参画するようにしている。（全ての教員が同じ目的に向かっていることで大学としての方向性がより強いものとなっていると感じた。）
- ・就職支援は1本のレールと言うより3年の後期あたりから平行で走っている感じ。3年後期に進路指導調査票を配付して進路の希望を聞く。この調査票を出さない学生は支援をしないことを伝えてあるのでほとんどの学生が提出する。その後就職課の中で5名の関係ないスタッフが学生全員に面接を実施する。
- ・この面接で進路を聞いて小学校，中学校のコースにわかる。特に英語については国際学部の学生も入ってくるが特別扱いはせず全てのコースを受講するように指導する。
- ・1年生のふれあい体験で学生のモチベーションが高まり，担当の教員の所に学生が行くようになる。（現場の体験が，学生の意識向上につながり，教員の受け止めもよい）就職委員会で各教員に情報を提供して，現在の学生の様子を知らせている。
- ・ふれあい体験での感想を書かせて，それを各教員に提出させている。学生の考えていることを理解する上で有効。（但し，書いたことを添削しなければならず負担になるため教員には不評。）
- ・ゼミ別の学生の就職状況を定期的に出してもらっている。これも教員からは不評。

(3) 就職支援プログラムの各種講座の担当者はどのような方々か

- ・教員採用試験面接官経験者，現職教員，教職経験者，就職課職員などが担当する。
- ・主に事務方が時間割などを調整する。

2 教育実習について

(1) 教育実習の記録について，どのような書式(ノート)をお使いか(電子化も含めて実施しているか)

- ・取り扱いについてまずはじめに注意をして学生に使わせている。記述式のノート。電子化はしていない。
- ・22の市町と協定を結んでいる。300人の学生を協定に基づいて割り振る。中学校などは教科の関係などで変動もあるが，6月には実習先が決定。小学校113校，中学校72校
- ・実習前に事前指導6回，事後2回計8回の指導をしている。小学校は3年の9月から4週間よって5月から8月までに6回の事前指導。①教育実習の意義，②小学校とはどのような所か，③年間指導計画，教材，④道徳指導，⑤授業計画，指導案の作り方，⑥学外講師による指導（授業・学級経営）などを事前指導しその後各実習校からは直前指導をして実習に望む。終了後の7回8回目で⑦学生同士の話し合いや，⑧教師としての使命感などの指導をする。
- ・中学校は小学校実習の3週間後に実習が始まる。事前指導は教科の指導，生徒指導，進路指導，部活など，新しい分野や中学校教育の現状と課題。生徒指導で実習生が心がけること，道徳，学外講師による教科別の指導，学生が心がけなくてはいけないこと（テーマ）を与えて実習に望み11月頃実習終了後は，7回8回で事後指導をし，テーマが自分にとってどうであっ

たかを振り替えさせる。中学校は教科専門であるためにこのテーマ設定が小学校とは若干違い特色になっている。

- ・小中学校別々に設定して指導していく。事前指導、実習、事後指導を3年次で重ならないように並行して受講し、実習も小学校と中学校の両方に行く。小学校の事前指導と中学校の事前指導事後指導両方を受けて（8回×2）実習は3年次で完結（各4週間ずつ）
- ・各指導教員は多くの実習校への挨拶回りなどに時間をとられる。実習ノートは実習生個人の責任でしっかり記録を残すように指導している。よって記述式のものである。

(2) 学生の修学の記録などの書式はどのようなものをお使いか。（上記と重複）

(3) 実習での成果と課題を、モチベーションの継続として持続できるような工夫として、どのようなことをしているか。

- ・4年次の前期は就職の勉強が中心。
- ・4年次学生がボランティアなどがあれば参加させることもある。
- ・4年次になると心の病を抱えた学生などが出てくる。実習校の協力には心から感謝しているが、時として実習先の指導教員から自分の欠点を指摘されてショックを受けてくる学生もあり、それに対してフォローをしている。まじめな学生が多く、だんだんと鬱状態になっていく場合もある。与えられたことはできるが、応用がきかないといった学生の特色があるようである。
- ・各実習校では本学の学生のために尽力していただいている。実習校の協力がないとやっていけない実情はある。身だしなみ、礼儀などについては厳しく指導をしている。（事前指導の中でやっている）
- ・学校インターンシップは教育実習に行った所にお手伝いに行くような活動である。3月に各学校に依頼書を送る。4月の時点でオリエンテーションをして、希望表の一覧を学生に配る。学習支援や補助、不登校の子どもの学習補助、理科支援などが6割、行事活動（遠足、スポーツテスト、合唱）の手伝いが25割。部活動の指導が5割。その他（特別支援）などの補助に入る。希望が学生から出ると、受入先との兼ね合いで調整を行い、学校インターンシップに行く。
- ・インターンシップでは教育実習でお世話になった学生に指名がくる場合もあるが、学生の予定も調整した上で実施の可否を決め、全てボランティアで行い無償。個別に実習校から学生に依頼がある場合もある。

(4) 事前指導としての教育実習特別講義の回数や内容。

- ・事前指導の回数や内容は(1)のとおりである。
- ・立ち居振る舞い、礼儀については、日常のやりとりの中で、言葉遣いを指導している。例えば事務方（実習課の職員が）学生がものを頼みにくるときに入室、受け答えなどをその都度指導をしている。これは実習課に学生がきたときの指導。
- ・教員については細かなことは言わないが、授業の出席の取り方についてしっかりと挙手して返事をするように徹底をしている。教員にもこれを伝えて実践していただいている。（学部長さんの話）
- ・260名中50名が岐阜県内に就職している。今後卒業生がいる学校に実習生が行くことが考えられる。その節は厳しいことを実習で言われても、後輩に配慮した言い方をしてくれて心の病にならないようなことも考えられる。男女共学になって1期生が50代になってきた。

3 学校インターンシップ(教育ボランティア)について

(1) 学生の運営委員会のような組織的な運営をしているのか

- ・特になし。先生や事務の主導。教育実習課でとりまとめている。
- ・教育委員会独自のボランティアなどもあって。このような場合はシリーズものが多く。定期的な活動への支援ができる場合がある。同じ子どもたちとのふれあいができるために人気がある。
- ・4年生がボランティアには参加している割合が高い。

(2) 小中学校からの様々な要請に応えるとあるが、振り分けの方法や派遣先の決定などの事務作業をどのように進めているか。

- ・仕分けや調整は全て事務方が行っている。
- ・学生の希望と受入先にニーズがミスマッチすることもある。普通日などは授業に出てもらわないと困るため。

(3) 学生の活動内容、状況などについて把握するための、ボランティア先との連絡・連携をどのように行っているか。

- ・学生にインターンシップの出勤簿を渡して、それが出席の証。終了後は認定書を渡して採用試験などに生かすようにしている。日数、時間数の取り決めはない。

- ・主に4年生が中心だが、4年生も前期は採用試験があり、その後は卒論があって時間的には厳しいものがある。

4 その他

(1) 最近の学生の特徴(長所、短所)と進路指導の関係について(省略)

(2) 入学時点での意識調査や、進路希望の把握について

- ・入学時点では調査はしていないが、先輩たちの就職状況は全て話す。またオリエンテーションで各学年とも試験をする。入試課ではアンケートをすることがある。私学は国立を落ちた子が入ってくるので4年後は自分が優位に立ちたいと意識をもって授業に臨んでいる。
- ・入学時点では不本意に入学してきた子が多いので、逆に勝負は4年後と切って切り替えをさせている。

(3) 学生に対する日常の生活指導と教職員の意識の統一について(省略)

(4) 教員採用試験における学部教員の関わりについて

- ・教員採用試験の1次対策は集団面接がメイン。筆記は自分で行うように指導している。2次はお盆の3日間に教員全員を巻き込んで体育、美術、音楽など全てのプログラムが受けられるようにしている。子どもを前にした対応を試験に課す県もあるので子ども役、保護者役を学生にさせて体験させている。
- ・70名の教員がいるができる限り協力をお願いしている。
- ・大学なので教養や学問を磨いてもらいたい。あまりプログラムを詰めすぎるとゆとりがなくなってしまう、このあたりのバランスが難しい所である。

<視察を終えて>

- ・山梨大学でも2年次に観察実習を行い、3年次で主免、副免の教育実習を行っている。また教育ボランティアの制度もあり、学生委員会による運営などはむしろ本学の方が先進的な取組をしているともいえる。しかし、高い就職率を岐阜聖徳学園大学が維持しているのはなぜなのだろう。

・話し合いの中で感じたこととして

- ①学生自身が入学の際不本意な思いをして入学してくる。という五島氏の発言が印象に残った。他大学の人に負けたくない。という**強いハングリー精神**が学生たちの根底にあるように思えた。キャンパス内ですれ違う学生が挨拶をしてくれたこと。両手がふさがっていた私たちにドアを開けてくれた学生。これも日頃の教育の成果なのであろうか。また、視察前に**生協の書籍部**を見せていただいた。こじんまりとしたスペースであったが、そこに**学習指導要領の解説書が全教科置かれていた**。こっちは安価なのでよく売れるとのこと。このようなちょっとした環境整備も学生の意欲を喚起する意味で必要なことと感じた。



- ②1年から3年までの前期に行われる「**一般常識・基礎学力テスト**」は自分の実力を知る意味で継続することに意義がある活動と感じた。
- ③クリスタルプランで**1年次に「学校ふれあい体験**」を行って現場の様子を早くから知る体験を課している。本学では学生ボランティアがあるが、1年生は各自の授業があり参加率は低い。むしろ1年次からこのような体験をすることも意味があるような気がする。
- ④**就職課の職員が10名いて、時間割の調整などきめ細かな連絡調整をしていること**。事前実習の時間割調整や学校インターンシップで協力校と学生のニーズを調整することなどはかなりの事務作業である。

- ⑤教員の意識として担当の学生の**実習先への挨拶が、それぞれの教員が行う**というシステムは本学と大きく違う。例えば5人の担当学生がいて、それぞれ実習校が違えば5校に担当教員は挨拶に行くことになる。しかしこのような手厚いしかも教員が皆同じ方向性をもって指導に当たるような体制もこれからは必要になってくるのかもしれない。
- ⑥本学でもキャリアセンターや教職支援室などで教職支援に向けた取組が行われている。岐阜聖徳学園大学の取組は様々な取組を**コーディネート**して学生が万遍なく参加できるような連絡・調整をしている部署が就職課であった。このような**マネジメントの方法**は参考になった。

- ・今回、萩原、小池、山村の3名で視察に行く機会を与えていただいた。視察したことを今後の業務の参考として、学生たちの支援に生かしていきたい。

■秀明大学視察の概要についてのご報告

日時：平成24年年12月11日（火）

場所：千葉県八千代市 秀明大学にて

視察者：小澤 理 平井政幸 樋口裕子

秀明大学出席者：学校教師学部 学部長 近藤公一様 教授 後藤 茂様

はじめに

八千代緑が丘駅からスクールバスで大学に向かった。乗客は大学の学生や教職員らしい人が20人ほどいた。13時から訪問予定であったが、30分ほど前に到着した。学生の数も少ないためか、大学の建物は余裕をもって建てられていた。講義棟の奥には、学生寮が2棟あり、こちらの方は8～10階建ての大きいものであった。時間があつたので学生食堂を覗いてみたが、数か所に集まっている学生がほとんどトランプをしていた。最近ではなかなか見られない光景であった。

大学構内を歩いていると、スーツ姿の学生が大勢いて大きな声であいさつをしてくれる。髪型も長髪や茶髪の学生は見かけられない。その学生たちは学校教師学部棟へ入っていった。他学部の学生とは明らかに違う身なりで、一目で学校教師学部の学生であることが分かった。



秀明大学について

- ・学校教師学部、総合経営学部、英語情報マネジメント学部、観光ビジネス学部の4学部から成っている。学校教師学部は2008年度に誕生、68名が入学した。
- ・学校教師学部1期生が2012年度の公立学校教員採用試験64名中24名が合格し、合格率は36.4%、全国平均を大幅に上回る。臨時的任用を含めた教員就職率は71.2%である。
- ・学校教師学部は1年次から学校現場研修を取り入れ、全員が学生寮生活、夜間学修、海外教育視察研修を実施する等、大きな特徴がある。

1 秀明大学教育研究所について

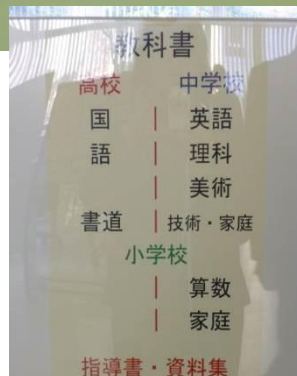
秀明大学教育研究所は5県を除きすべての県に分室が設置されている。元校長等の職歴の

方が客員教授として配置されている。そこでは、学生の募集活動、地元での教育実習の支援、ふるさと教育研究の橋渡し、入手した県教員採用試験問題を支援センターへ送付、OBへの教採支援等を行っている。

2 教職支援センターについて

教師学部棟1階には教職支援センターを開設している。そこでは学生が常時指導を受けられるほか、気軽に相談することが可能となっている。

また、教科書をはじめ必要な図書教材が閲覧でき、教材研究ができる場所となっている。都道府県別の教採試験問題や対策問題集もそろっている。新聞記事や専門誌、インターネットから教育情報が得られるようになっている。実践演習室が4つあり、模擬授業を行うことができる。



各出版社の小・中・高の全教科書だけでなく指導書も揃えられていた。教採関係の資料も充実していた。また学習指導要領・解説書も数冊ずつ並んでいた。新聞記事のスクラップ集も多数並べられていた。



教育支援センター内には教室仕様の部屋が4室あり、模擬授業ができる。

センター内には多くの黒板があり、板書の練習など、いつでも学生が使用できる。



<組織・・・4チームから形成されている>

- ① 教師力支援チーム・・・教師に求められる資質・能力を学生自らが伸ばすための支援活動の企画、推進を行う。

学校教師検定(2年次・3年次に2日間にわたり実施 1000点満点で採点する。

内容：専門教養・教職教養・論作文・集団面接・集団討議・模擬授業等。

問題作成から採点・事後指導まで学部の教員全員が関わっている。

- ② 選考支援チーム・・・相談活動、選考試験の情報提供、教採合格に向けた指導・助言、求人情報の提供・就労などの支援を行う。
- ③ 実習支援チーム・・・教育実践演習 2単位

(1年次 毎週1日1年間の学校現場実習, 2年次 毎週1日半期の学校現場実習・・・各地教委と協定があり, 配置校は地教委が学生と面談後決定する。

3年次 プレ教育実習, 4年次 教育実習)

市教委との連携・・・面接実施, 諸問題の解消

- ④ 管理広報チーム・・・図書・参考書の整備・事務機器の管理などを行い, 学生が活動しやすい環境を整える。

3 教育実習について

プレ教育実習を3年次に秀明大学附属中・高で行う。

教育実習は4年次に地元の母校で4週間行う。学生の意識が高いため受け入れ校の評価は高い。

4 学校教師未来塾

教育研究所が高校生対象のキャリア教育の一環として実施している事業である。

教員をめざす高校生を対象に, 教職全般についてのセミナーを行う。最後には高校生が模擬授業を行う。8都道府県で実施している。

5 全寮制について

- 学校教師学部は全寮制で, 1・2年生の時は二人部屋である。年二回定期的に部屋替えがあるが, 同室がどうしても無理な相手とは申し出により替えることができる。寮生活ができるかどうかは, 入試の際, 面接をして判断



学生寮

する。相部屋生活ができないようであれば成績が良くても入学はあきらめてもらう。どうしても教師になりたいという強い意志を持つ者を入学させたい。

- 寮生活を通して人間関係やコミュニケーションを学び, 力がつく。
- 月から金曜日までは大学で提供する食事をするが, 寮のなかにも共同の炊事場があり自炊することもできる。
- 寮の管理は寮監・寮母が行う。共有部分の清掃等は業者が行う。



寮と講義棟は渡り廊下でつながっている

6 その他

- 夜間学修 (毎晩6:30~9:30までの3時間 学校に来て勉強する。)
 - 採用試験にむけての取り組み
 - 1年生 専門教科の力をつける 時事問題討論
 - 2年生 一般教養 教職教養 模擬試験
 - 3年生 マイルストーン(研究所で発行している)を使いながら集団討論, 集団面接, 論作文, 場面指導, 模擬授業, 他を学ぶ。
- 20ほどの試験対策講座も開設する。
- 大学の若手教員は全国の教採の過去問題を解いている。採用の際, 研究と教育のバランスで, 「教育」に重点をおくことを説明している。教員もそれを理解しており, 自分の空き時間や夜間学修にも積極的に参加している。学生とたいへん近い位置にいると感じている。

- ・地教委の後援を受け、秀明大学学校教師学部公開授業研究会を行っている。

7 教職支援センターの視察

大学側の説明が終わった後、教師学部棟1階にある教職支援センターを実際に見せてもらった。そこには教職員の執務コーナー、相談コーナー、実践演習室、資料コーナー、閲覧コーナーなどが設けられていた。印刷機や事務機器も揃っており、学生が教育実習や模擬授業のための指導案や教材を作成するのにいたいへん役立つ設備である。

講義棟の2階には図画工作室や家庭科室などもあり、教員を目指す学生にとっては非常に恵まれた環境であると感じた。

視察を終えて

- ・入試で面接をし、教師になりたいという強い意志をもった学生を入学させ、全寮制かつ1・2年生は二人部屋という条件、授業はスーツ姿で出る等、今時の大学生に受け入れられるのかという多くの制約のある環境であった。しかし構内ですれ違うスーツ姿の学校教師学部の学生は、明るく大きな声であいさつをし、授業に向かう動きには若さ・活力を感じた。教師になるという目標に向かって、自分の力をつけるために今の大学生活を送っているように見えた。
- ・昨年度、第1期の卒業生を出したばかりの新しい学部であるが、一人でも多くの学生を教師として送り出すために教員組織が一丸となって指導に取り組んでいる。研究と教育の「教育」の部分に比重がかかっていることが分かる。
- ・1年生から学校現場に出て、教科指導や生徒理解等を学ぶことは、教師を目指すうえで大切なことである。1年間または半期にわたって関わることで子どもたちの変化や成長が理解できるとともに、学級担任の指導技術や教科の指導方法も学ぶことができる。
- ・教職支援センターの設備も大変整っていた。大学で、模擬授業や教材研究、教材作成ができることは重要である。教員採用試験のための資料や参考書が豊富にあり、学生がいつでも利用できる状態になっている。実際に数名の学生が閲覧室で勉強している姿を見た。
- ・全寮制で、教師を目指すという同じ目標を持つ者が一緒に生活することで、共通の話題も多くなるであろうし、互いに切磋琢磨することができる。毎日3時間の夜間学修も、仲間がいるから続けられることもある。
- ・学生と大学の先生の距離が大変近いと感じた。ゼミをしている部屋を廊下から覗いたが、先生も学生も大変和やかな雰囲気の中で授業を行っていた。また視察途中にすれ違った学生に、学部長が名前呼び止め指導を行ったが、学生の反応も素直な返事で人間関係ができていたことを感じた。

終わりに

秀明大学の視察という機会を与えていただいたことに対し、中村学部長先生はじめ関係の皆様へ感謝を申し上げる次第である。また秀明大学の近藤学部長先生、後藤教授には長時間にわたり説明や施設案内をしていただき、心よりお礼を申し上げます。

視察してきたことを今後の学生の支援に生かしていきたい。

■「教育相談室」及び相談室の備品をどうぞご利用ください

教育相談室(L-428)をどうぞご利用ください。ご利用に際しましては、事前に教育実践総合センター事務室(J号館4F)にて空き状況を確認の上、ご予約ください。鍵については事務室にお尋ねください。心理検査やソーシャルスキルトレーニング用ゲーム等備品も貸し出しております。ご利用の際には、備品使用ノートに必要事項のご記入をお願いします。